論　文

新出―中島杏子宛前田普羅葉書
（昭和24～26年）

Newly Discovered Postcards from Fura Maeda to Kyoshi Nakajima（1949－1951）

大　西　紀　夫
OONISHI Norio

はじめに

筆者は、今年、富山ゆかりの俳誌『辛夷』の主宰者として、越中の近代の俳壇の基礎を築いた前田普羅の葉書十三通を、たまたま古書店で発見した。いずれも普羅の後を継いで『辛夷』の主宰者となった津沢の俳人中島杏子宛のものであった。この発見については、平成二十二年八月二十四日付『富山新聞』朝刊で紹介された通りである。以下この十三通を紹介し、解説する。

①六月三日（昭和二十四年）　　普羅六十六歳

五月二十七日、朝、高松に着きてより、直ちに多忙は開始され、本日までハガキ一枚書く暇もなく、今日午後五時発の汽車にて、四国をはなれます。亡妻とき女のため、氏の寺の尼僧の法養（ママ）をうけました。

二、三日前より梅雨入りめき、白蝶無数に飛びます。午后より青年等の辛夷支部発会式にのぞみ、その足で出発します。いろ〳〵のものを見、又いろ〳〵と学びました。大和関屋で休息して十一日高岡に着き、東亜合成の句会にのぞみ、十二日に帰宅します。（但し予定）行乞君の配慮による所多く、感謝して居ります。元気です。

麦刈るや頂かしぐ讃岐富士

六月三日朝

四国香川県多度津町勝林寺にて　　前田普羅

［解説］

この讃岐行は、「上西行乞の誘引に従って五月二十五日出発讃岐に遊吟、六月三日多度津より帰る。帰途六月四日大和関屋の烟霞亭入る」（『普羅小伝―聞き書き』（『前田普羅―生涯と俳句』中西舗土著　以下『小伝』と略記）であった。また讃岐滞在中は葉書によると連日多忙を極めたようである。宿泊したのは丸亀市の無茶庵高畑無茶宅であった（『評伝　前田普羅』中西舗土　以下『評伝』と略記）が、この葉書によると、多度津町勝林寺にも宿泊した。この寺では、尼僧に頼んで、昭和十八年一月二十三日死去した亡妻ときの法要を営んでもらっている。

「辛夷」昭和二十四年七月号、八月号の「会報」普羅先生歓迎の句会の日程は次の通り。

五月二十八日　丸亀句会
二十九日　高松句会
三十日　坂出句会
三十一日　観音寺句会
六月　一日　勝林寺句会

なお、「辛夷」七月号巻頭の「讃岐の六月」に、この「麦刈るや」の句を載せる。

おおにし　のりお（経営情報学科）

②六月七日（昭和二十四年）

六月三日夕、高松をはなれ、四日朝、大阪に入り、直ちに大和関屋に入りました。十日には高槻市の湯浅乾電池支部の句会がありますので予定より一、二日帰宅がおくれます。関屋でも毎日よく昼寝をして居ります。明八日は大阪へ出て映画を見るつもりです。四国入りは大成功でした。上西行乞君の御骨折り感謝の外はありません。冬には又四国入りをします。旧知の人が出現して四国も決して未知の地ではなかったのでした。世間はせまいものでした。昨日暑くて梅雨入り、本日冷気風つよしです。四国の鯛は美味でした。とりいそぎ、敬

奈良県下田局下二上村穴虫　奥田由三氏方

前田普羅

［解説］

四国行の世話をした上西行乞は、「旧満州から『辛夷』に投句をつづけていた上西行乞は普羅信者といってもよいほどに普羅に傾倒しており、郷里の香川県に引揚げてくると、いつか普羅を招きたいと念願し、実現したのは行乞が内地に引揚げた二年半の後だった」（『評伝』）。

大和関屋の奥田あつ女は普羅の弟子で、『辛夷』の閨秀作家として注目されていた。関屋へ疎開以前の大阪時代からの知人で、夫の由三氏とともに疎開先の関屋にそのまま戦後も住み続けていた。普羅が誘いの手紙を受け取ったのは、昭和二十一年七月のこと。はじめて訪れたのは、昭和二十三年三月であった。それ以来余程気に入ったのか頻繁に訪れている。二十三年暮にも訪れ、越年している。そして今年もまた続けて越年しているのである。

明子が嫁いだあとは、普羅は全く一人の生活になってしまい、勧められるままに奥田邸を頻繁に訪れ、長期間逗留したのは、晩年の孤独を癒すためもあったのであろう。なお、この奥田邸には普羅のために一室が用意されていたという。

③六月二十一日（昭和二十四年）

前省、十九日午前十時頃、東京明子の所に着きました。車中、水上駅あたりより雨しきり東京は梅雨らしく物しずかでした。横須賀駅に着いたら砂子、宵路、よし女、□一氏が出迎へてくれました。バスで会場に運ばれました。会場は共済協会支部で四楓君の事務所です。立派な建物でした。豪雨となり、句会は進行しました。四楓、砂子、宵路君の四人で氏の事務所にとまりました。句会中、あなたよりの一杉君死去の報に接しびっくりしました。それに今日は禾人君の祥月命日の（一周忌）でした。感無量です。足の悪い佳女さんは大雨の中を鎌倉にかへりました。諸君が足のわるいのによく来てくれたと、悦んで居りました。

今日二十一日西荻窪で句会です。珍しく毛利千棟君が現れました。横須賀に居るのです。杏子君が来るからとて砂子君が三日間の休暇をとって待機されてゐるのです。小生元気。　　敬白

六月二十一日、東京都（蒲田局下）糀谷町一ノ八四　石井方

前田普羅

［解説］

一人娘の明子は前年昭和二十三年七月十日、石井氏に嫁し、東京にて結婚式を挙げ東京に暮らしていた。辛夷横須賀支部の人たちは俳誌「虎魚」を発刊し、六月十九日に一周年句会を催し、普羅を招いたのである。同人の四楓は加藤四楓、砂子は渡辺砂子、宵路は吉田宵路。よし女（佳女）は大野佳女、鎌倉から来ていた。

この時、訃報を耳にした一杉君は本田一杉。大阪の人でその死については、『辛夷』昭和二十四年八月号の「消息」で、「辛夷横須賀支部の「虎魚」発刊一周年の会に列した六月十九日の夜、電報で大阪の本田一杉君の急死を知った」と記す。

また、この日、命日であった禾人は杉本禾人。この人とは明治の末、横浜子規会の句会で知り合って以来の友人で、もう一人の友人雞村とともに上京の度に会合して、その友情は生涯変わらなかったという（『小伝』）。昭和二十三年六月十九日没。

④六月二十三日（昭和二十四年）

昨夜は武蔵野支部で小句会、荒梅雨で帰れず、十二時まで大いにしゃべり、近来のたのしい会でした。二十二日は快晴。深川の藤倉電線で五社聯合の俳句会、これも盛会でした。洋服に下駄ばきと云ふ人を小馬鹿にしたなりで東京市内をあるきますと、服装をとゝのへたる人が馬鹿に見えます。

さつき帝劇で映画を見ましたが、大部分を寝てしまいました。今夜深川泊り、古い友人の宅です。又一句会と酒でせう。二十九日には津沢にかへります。

敬

六月二十二日

東京にて　前田普羅

［解説］

二十二日、句会のあった深川の藤倉電線については、『矢口句抄』（『定本』）のこの年の項に、

東京藤倉電線句会

荒梅雨や葛西葛飾かなめ垣

の句を載せる。

⑤六月二十六日（昭和二十四年）

昨日午前十一時頃前橋市に入りました。眠り不足のため、気分が不快でしたが、英邦居の一睡で、今朝は大元気、午後の句会には大いに毒舌を振ふつもりです。梅雨のもなかにて（ママ）、梅雨翠が茂って居ります。明日は長野に入り、二十八日には帰途につきますが、津沢帰着は二十九日になります。今夜英邦居では十一名位の会食がありますが、相変わらずの貌ぶれだけに楽しいのです。

敬

六月二十六日

前橋市岩神町　中島英邦氏方　　前田普羅

［解説］

この年九月二十一日、長年住んだ越中の地を去る（『拾遺句集』『定本前田普羅』以下『定本』と略記）。昭和二十二年の項に、「十一月二十三日、前橋市岩神町英邦居の日当る縁にて、夫妻と作句す。　思い出てひとしきり燃ゆる焚火哉」とある。

『矢口句抄』（『定本』）のこの年の項に、

前橋臨江亭

利根川の岐れし水の花あやめ

の句あり。中島英邦氏の居が利根川に近かったので臨江亭と称したのか。

⑥八月二十六日（昭和二十五年）　　普羅六十七歳。

秋らしくなりました。その後の御起居如何ですか。小生まだ千葉県に居りますが、明日一句会をやり帰郷します。一昨日在京中の遠藤さんより来看、私も在京で遠藤さんに御目にかゝりたいと存じます。薮寺の諷誦会も済みました。胸中に去来する幾仏、一々貌が思ひ出せます。この辺りの町によい売家が沢山あり、価格も意想外に安い様です。

それに東京へも2時間以内で行かれる点、西多摩の増戸村より好都合です。社会の事情は刻々に変はって居ります。食物の安くなった事、東京市内ほど暮し易いのです。それも日本橋、京橋、神田、浅草等で、云はゆる山の手は餓鬼道をさまよう鬼の相です。それに諸種の時代的犯罪人は多く山の手に居住して居ります。先頃お送りした津沢中学校歌は又少し文字を換へました。拝眉の折（九月上旬）に定稿を御らんに入れます。

どうも私は此の関村の気風がいやです。心の世界なぞは少しもなく浅間しい物質的虚名を追ふ奴ばかりです。私と私の父とが父の死ぬまで争ったのもこの点に遠い原因があったのでせう。今になって判りました。

秋や来る終に淋しさにもなれず

自然を人より多く愛するからでせうか。かゝる性格をもつも人生悲劇です。

八月二十六日　　敬白

千葉県長生郡関村関　前田武雄方　前田普羅

［解説］

普羅の滞在していた関村は、千葉県長生郡関村関（現在千葉県長生郡白子町）。普羅は「東京で生まれた」と言っていて、関村は出生地ではない。父丑松の郷里が関村であった。このあたりの今でも「前田」姓が多いと云う（『評伝』）。

なお、父の丑松は明治三十年頃、十四歳の普羅を東京の親戚に残して妻とともに台湾に渡ったと云う。しかし、仕事が思わしくなかったのか、妻のりせの健康がよくなかったのか、早々に引揚げて来ている。普羅はその間、祖母の出の大多和家の一族の家に預けられていた（『小伝』）。

この葉書では、戦後急速に経済至上主義で変貌していく山の手を中心とした東京を、「餓鬼道をさまよう鬼の相」と嫌悪感をもって述べ、その

想いは、更に自分の故郷に対しての複雑な思いに繋がっている。そうして生涯疎遠であった父親への想いに発展していく。物質的虚名を追う関村の気風や父親の生き方と心の世界を求める自らの生き方との大きな隔たりがあるが、自分のこの俳句に没頭する生き方は、「自然を人より多く愛する」性格が原因である。しかしこのような性格を持つことは人生の悲劇であるとまさに普羅の人生観を披露しているのである。

また「秋や来る」の句は、「辛夷」の昭和二十五年十月号の巻頭の「秋風早し」に「総関村にあり　二句」と前書があって、この句のほかに「灯籠の油の上の露の玉」の句も載せる。

⑦九月二十九日（昭和二十五年）

二十二日夜、石動発、二十三日朝、前橋着。一泊句会、用談を済ませ、二十四日、東京明子方に入り、二十六日甲州に向ひました。同所舟木己栖、高橋禾洞、甲府より東八代郡境川村角田一布居に入りました。

中秋は無月。昨二十八日に到り初めて明月、二十九日は快晴、諸山一望の中にあり。二、三日滞在のつもり。越中滞在中の御厚意を深謝いたします。

例の婚の件、順調です。出来るならこれで決定せしめたく思ひます。先方は東京に居る歌人だそうです。

小生の貧乏は承知の由、己栖・禾洞は昨夜帰京しました。今日よりしづかです。

駒ケ嶽、八ガ嶽、鳳凰、白根等眼前にあり。夜は月下の虫声に心を澄ませます。

九月二十九日

山梨県東八代郡境川村角田一布方

前田普羅

甲斐ヶ根の姿けはしき無月かな

[解説]

この年十二月、前橋の伊東享の肝煎で同地の北沢肇世と結婚。（数ヶ月で別れる）。また、『矢口句抄』の昭和二十五年の項に「甲斐境川川村竹雨居一泊」と前書「木犀の匂える闇の竹の声」の句を載せる。

角田一布は飯田蛇忽の義弟で、「ホトトギス」時代からの交友であった。東京で船医をしていた。『辛夷』昭和二十四年の十一月号の「消息」（杏子記）では、「同人角田一布君は、今度郷里の人々の懇情を容して東京を引き払い山梨県境川村診療所長として赴任された」と記す。居を竹雨居と言ったか。

⑧十月二十八日（昭和二十五年）

二十三日より大和関屋に来て居ります。附近の丘を少しあるいたきりでまだ、目ぼしい吟行はやりません。いよ〳〵帰るとならないと切迫した旅意がおこりません。十一月初旬より奥田君同行で信州三原附近で浅間山を見、七、八日頃には越中に入るつもりです。秋晴で大和の野は大阪人のハイキングの賑やかですが、此の人達には風格がなく、山野が汚されるやうな気がします。いづれ拝眉の上後自愛を。

十月二十三日

大和の旅にて　　前田普羅

【解説】

大和関屋の奥田邸に前年に引き続いて滞在している。

『矢口抄』にはこの時詠んだ句として、

十月二十二日　大和関屋に着く

秋霧や影を大きく番ひ鳥

十月二十九日　ひとり出て薬師寺、唐招提寺の邊をありく

東院堂秋冷人を突く如し

唐招提寺にて

金堂の柱はなるゝ秋の蝶

などを挙げている。

⑨十一月三十日（昭和二十五年）

いろ〳〵御世話になりました。二十四日関屋着。一睡の後、大阪に歌舞伎座を見に行きました。久しぶりの狂言を味ひ大へんに面白く思ひました。然し山門五三桐と云ふ大道具狂言は思わず吹き出しました。

三、四日には東京に居ります。正月は千葉県でやるつもり。東京は寒そうです。十三、四日頃より又越中に参ります。

御両所とも御自愛を。山で雉子が鳴いてゐます。

十一月三十日

奈良県下田局下二上村穴虫

奥田氏方

【解説】

⑧の葉書では、（十一月）「七、八日頃には越中に入るつもりです」とあるように、十一月初旬には越中にいて、下旬の二十四日には再び関屋の奥田氏のもとにいたのである。このような慌しさは何であろう。精神的な不安定さが感じられる。

⑩二月十日（昭和二十六年）　普羅　六十八歳。

一月二十三日に福野を発ち前橋市二十七日まで居ました。前橋の寒さで風邪をこじらせ、二十八日以来今日まで臥床。本日暖かいので起床いたしました。そんなわけで御礼申上げるのも延引し、申訳がありません。発熱が少く食慾があるので体は弱はりませんが下腹から咳き上げる咳で全躰が痛みます。生まれてはじめての長患ひでした。

今日は暖かです。全村梅花七分咲き、明日は東京支部の連中、梅見に来ます。とりいそぎ。　　敬白

二月十日

東京都西多摩郡増戸村北伊奈

前田普羅

［解説］

東京都西多摩郡増戸村北伊奈には、普羅の継母の連れ子の年長の姉が疎開してここに住んでいた。この人とは疎遠ながらもつながりを保っていた。普羅は近所の大場さんという家の一室をまず借りたのであった。場所は、「五日市線武蔵増戸駅の駅前だった。多摩川支流の秋川が近くを流れて水清く、附近にはところどころ梅林があり、普羅は良い土地柄だと思い、ここで家を建てようとした。東京駅から二時間半であるのも、不便を感ずるよりも、大都会の喧騒を避けるのによかった」（『評伝』）。

⑪八月八日（昭和二十六年）

三条市の小杉君を同人にしてください

明日より左地に行き、八月中は滞在いたしますので辛夷八月号は三、四冊だけ左地に御送付下さいまし。御手数ですが御願ひ申します。九月は八、九日頃までに貴地に到着いたします。俳句会の日程十日頃よりとして御編成下さいまし。

左記（千葉県長生郡関村関　前田武雄方）

八月八日

東京都西多摩郡増戸村北伊奈

前田普羅

【解説】

千葉県長生郡関村関の前田武雄は前田本家である。『小伝』のこの年（昭和二十六年）の項では、六月二十四日に生涯三度目になる佐渡に入り、七月三日には佐渡を離れ、四日には越中に入っている。七月中は越中滞在で、二十一日には富山県伏木町の山上に建つ句碑のため「雪山に雪の降りゐる夕かな」の句を伏木の石工の所で石に揮毫している。

⑫十二月三日（昭和二十六年）

十二月一日、夜大阪発急行にのり、二日朝、東京にかへりました。旅中いろ〳〵の御厚意に接しました。越中大雪の報は奈良で知りました。然しそんな準備はしてある筈、只々風邪ひかぬ様にして下さい。

小生も風邪気ですが大事に至りません。只咽喉カタルが時々くるしくなります。これから句稿のせいりやら仕事沢山です。年内をあたゝかく過したいものです。正月には大阪の人形芝居に又奈良へ行きたいと思って居ります。

十二月二日　　敬白

十二月三日

東京都大田区矢口町四五五

前田普羅

［解説］

十一月三日より二十五日まで、越中滞在。二十五日の大阪行きの夜行で、大和関屋の奥田氏の煙霞亭に入る予定と『辛夷』十二月号の「消息」に記す。この葉書によると十二月一日まで滞在したようであるから、十一月二十六日からすると六日間の滞在であった。これまでの大和関屋滞

在に比べてこのように短期間であったのは、この年、十月十一日、増戸村から東京都大田区矢口町の新居に移転していたからである。この場所はそれほどきにいった所ではなかったものの、これが最後の転居となった。

なお、十二月二日朝、東京に帰り、自宅に寄らず、そのまま娘明子の家に着いたが、その後気管支カタルの症状となる。

『辛夷』昭和二十七年一月号の巻頭「鶫堕つ」には、

東京、矢口町に住む

一とむらの落葉しきりに義興公

とある。

更に、奈良で聞いた越中大雪の報については、この後に、

越中の大雪を想い、

脱けて来し越中に雪つもるらし

と載せる。

同書の「消息」で、越中の大雪については、「新聞で見ると越中の方は大雪らしかったが、杏子君に聞くと噂丈らしいので安堵した。越中の雪のことを思うと寒さが身に沁みるが、また明子と居た頃の楽しい思い出がなつかしい。越中の雪をもう一度根かぎり歩いて見たいと思ふが、返らぬ愚痴のような気がして黙って居るのである」と記す。

⑬十二月十九日（昭和二十六年）

本日書留にて御厚情ある内容を頂きました。実の所小生十二月二日に帰京しました処、直に風邪をこじらせキカンシカタル（殊に喘息様キカシカタル）と云う奴にて先年貴地にて寒中にて発作苦しみしヤツです。三、四日は、このまゝ死ぬるかと困しみ、食慾減退、気力絶無、ひどい目に逢ひました。二、三日より食慾もどり昨日来近詠をつくり又整理して居りますが、他誌のたのまれ原稿は大分違約したのがあります。辛夷のこと常に念頭にあります。十二月号ニギヤカに出来ました。一月号にガンバッテ居ります。次便にいろ〳〵申上げます。

今日はこれだけで御ゆるし下さい。よき年をまつ。

在京太田区矢口町四五五

前田普羅

十二月十九日

【解説】

キカンシカタルを患ったことについては、『青巌通信』（『辛夷』昭和二十七年二月号）に、前年十二月二十日死去した原石鼎の葬儀に気管支炎になやみ乍ら二十三日に出席したことが載っている。

晩年の普羅

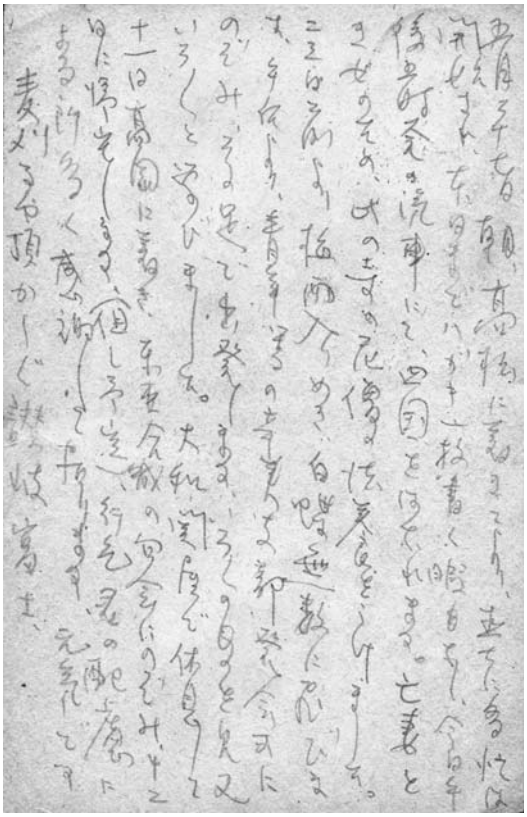
前田普羅（一八八四―一九五四）は昭和十八年（一九四三）には、妻のときを喪い、昭和二十年（一九四五）八月一日には富山の空襲に遭い、娘の明子とともに津沢に転居する。この後戦後の混乱期を何とか乗越え、中島杏子をはじめとした越中の弟子らの援助もあって生活も整いつつあった。ところが、昭和二十三年（一九四八）春には、とうとう最愛の

一人娘の明子が東京に嫁することになる。一人取り残された普羅は、その淋しさをまぎらすためもあって、奈良、東北、四国などを放浪するが、終には、昭和二十五年（一九五〇）九月、大正十三年（一九二四）以来、二十五年住み慣れた越中を去ることになる。そしてこの年の暮には、一人身の生活を立て直すべく再婚するがうまくゆかず、数ヶ月で別れている。そののち、義理の姉の疎開先の西多摩の増戸村などに定住しようと試みるが、結局、昭和二十六年（一九五一）十一月、東京の矢口町に転居をする。ここは、娘の明子のところへバスで二、三十分ばかりのところであったが、これが普羅にとって最後の住居となる。その後、健康の不安も重なり、ここが結局普羅にとって終の住処となった。

今回新出の葉書は中島杏子宛の昭和二十四年（一九四九）から二十六年（一九五一）までのものである。晩年の六十六歳から六十八歳にあたる。この間、俳誌『辛夷』発行所は越中の津沢においたままで、編集はもっぱら杏子に任せきりで、主宰の普羅は放浪の状態であった。

新出葉書の特徴

『辛夷』の「消息欄」には、同人への報告としての主宰の消息は、毎回掲載されているが、杏子への葉書には、この消息とは別の性格のものとなっている。例えば、昭和二十五年八月二十六付の⑥の葉書のように、普羅の生涯にはほとんど述べることのなかった父親への想いを述懐しているような所であろう。また「自然を人より多く愛する」自らの性格を人生の悲劇であると述べるなど、詩人としての宿命とでも言えることまでも述懐している。特に、故郷に対する複雑な思いについても杏子だからこそ心を開いても述べることが出来たのであろう。ともかく、これらの葉書は普羅を理解する上では大変興味深い資料である。



普羅葉書（昭和24年６月３日付）
エンピツ書き

【参考文献】

『辛夷』昭和二十四年～二十六年
『定本前田普羅』辛夷社　昭和四十七年
『評伝　前田普羅』中西舗土著　明治書院　平成３年
『前田普羅　生涯と俳句』中西舗土著　角川書店　昭和四十六年
『富山文学』（第１８号特集前田普羅）富山県芸術文化協会　２０００年
『前田普羅　その求道の詩魂』中坪達哉著　桂書房　２０１０年

（平成22年10月26日受付、平成22年11月11日受理）